原 著

オーストラリア初等・中等教育学習者の日本語学習に関するBELIEF

横林 宙世* L.デニス ウールブライト*

<要 旨>

オーストラリア、クイーンズランド州、トウーンバ市の私立初等・中等学校四校の日本語学習者のBeliefを調査し、全体の傾向、必修・選択別、学校別、男子校・女子校・共学校という学校の属性別の特徴を検討した。併せて、世界3位の学習者数を持ち、そのほとんどが初等・中等教育課程の学習者であるにも関わらず、知られることの少ない教育の実態も紹介し、それが学習者のBeliefにどのような影響を与えている可能性があるかについても検討した。調査の結果、公立校と比較して自由なカリキュラムを組める私立校では「国際理解・異文化理解、日本との親善・交流を深める」という初等・中等教育の学習目標が達成されていること、しばしば指摘される学習者の動機づけの低さ、不熱心さややる気のなさに関しては、対象学習者は高い動機づけと期待を示した。

キーワード：初等・中等日本語教育 私立校の生徒 生徒らのBelief 異文化理解 動機づけ

1 はじめに

オーストラリアの日本語教育の特徴は初等・中等教育の学習者が多いことである。世界3位（2003年調査）の学習者数38万人[1]中、初等・中等教育課程の学習者数が全体の97%にのぼる。その背景として、1987年に連邦議会で承認された「英語、及び英語以外の言語（Languages Other Than English : LOTE)」に関する政策において日本語が9つの優先学習言語の一つとして学習が奨励されたこと、また1995年から導入されたアジア言語文化特別教育プログラム（The National Asian Languages and Studies in Australian Schools）においても中国語、韓国語、インドネシア語と共に日本語が優先学習言語に指定されたことが考えられる。オーストラリアの初等・中等日本語教育（以下、日本語教育）の学習目標は、国際理解・異文化理解、日本との親善・交流を深めることである。しかし、一方では学習者の動機付け、不熱心さややる気のなさなどが問題点として指摘されている[2]。政府の言語政策により数を増した日本語教育の学習者はどんな気持ちで日本語を学んでいるのであろうか？オーストラリアの日本語教育に関する論考はシラバスやカリキュラム、教科書・教材、教師の問題についてが多く[3]、学習者についての研究は少ない。大学生の認識に焦点を当てたものも極めて少なく、年少学習者の認識に焦点を当てたものは管見では見られない。

本稿ではオーストラリアの中でもビクトリア州と共に学習者の多いクイーンズランド州[4]、トウーンバ（Toowoomba）市の4つの私立校を取り上げ、履修生徒の日本語学習に対するBeliefを検討する。併せて紹介されることの少ないオーストラリアの初等・中等教育の教育制度や日本語教育の現状、自由なカリキュラムを組める私立校の具体的な日本語授業についても紹介したい。

2 オーストラリアの教育制度とトウーンバおよび近郊における日本語教育

オーストラリアでは日本同様、高校までの教育は合計12年間である。初等教育（小学校）、中等教育（中学高校一貫教育）共に6年間の州もあるが、クイーンズランド州の場合は初等教育7年間、中等教育5年間である。義務教育は、各州とも10年生までで、10年生修了時に試験を経て義務教育修了証が発給される。日本の高校2年生、3年生に相当する11年生、12年生が中等後期課程であり、11年生以降の就学（進学）は任意である。初等教育課程から飛び級および留年がある。初等、中等教育は各州教育省が管轄するが、私立学校は、州教育省の直接的監督を受けない。私立校には、独立系とカソリック系があり、初等教育校、初中等部

* 西南女学院大学人文学部人文学科教授

分一貫校、初中等完全一貫校、中等前期校、中等後期校、更に中等一貫校というさまざまな設置形態がある。

2004年２月現在、トウーンバおよび近郊に公立小学校は11校あり、生徒たちは週1.5時間日本語、ドイツ語、インドネシア語、中国語のいずれかを学習する。高校総数は16校、うち私立高校[5]は10校である。日本語以外の外国語はドイツ語、フランス語などである。調査対象校はすべてカソリック系で、初中等部分一貫校と中等一貫校であり、男子校、女子校、共学校のすべてを含む。日本語は一般に８年生（以下Ｙ８）は必修で９年生（以下Ｙ９）から選択である。

３　目的

トウーンバ市の４つの私立高校の生徒の日本語学習に対するBELIEFにはどのような特徴があるか調査する。特に以下の４点に関して明らかにする。

① 調査対象校の学習者の全体としてのBeliefはどうか。
② 必修か選択かで言語学習、日本語学習に対するBeliefが異なるか
③ 学校によりBeliefは異なるか
④ 学校の属性別（男子校、女子校、共学校）でBeliefは異なるか

４　研究方法

４－１　調査時期および実施方法

Horwitz(1988)[6]の質問紙調査 BALLI(Beliefs About Language Learning Inventories）のESL Student Versionの質問項目を本研究の目的に合い、かつ児童生徒にも理解しやすいように一部書き直したものを使用し[7]、2004年３月に筆者が立会い授業中に実施、あるいは担当教師に依頼して授業中に実施してもらった。Beliefsの34項目は、学習の困難度６項目(Difficulty of Language Learning)、外国語適性９項目（Foreign Language Aptitude)、言語学習の特性８項目（Nature of Language Learning)、学習とコミュニケーションの方略８項目(Learning and Communication Strategies)、動機づけと期待３項目（Motivation and Expectation)に５分類されているが、本稿では言語学習の特性６項目、動機づけと期待５項目とした[8]。項目４と11を除く各項目に１「強く賛成する」～５「全く賛成できない」の５段階で回答してもらった。項目４および11は５肢選択から該当するものを選んでもらった。

４－２　調査対象校および調査対象者

調査対象校の概略を表１に示す。Mの調査にはＹ７生も含まれている。調査はＹ８の１部とＹ９～Ｙ12の大部分の生徒に実施したが、クラスの選択は現地校側に任せたので学年毎のデータ数にばらつきがある。

明らかに不適切な回答、すべて３、すべて１などは除いた有効回答数は必修149、選択158、計307である。内訳はＪ94（Ｙ８　53、Ｙ９－12　41)、Ｓ64（Ｙ８　25、Ｙ９－12　39)、Ｍ　87（Y7,8　54、Ｙ９－12　33)、Ｕ　62（Ｙ８　17、Ｙ９－12　45）である。

表１　調査対象校４校の生徒、アシスタント、教師の数

校名	性別	種類	Y8	Y9	Y10	Y11	Y12	計	assistant	teacher
J	共学	中等一貫校	130	25	15	6	6	182	1	1
S	女子	中等一貫校	105	14	13	12	5	149	1	1
M	男子	初等中等部分一貫校	130	18	18	8	12	186	1	2
U	女子	中等一貫校	90	30	16	10	6	152	1	2
		計	455	87	62	36	29	669	4	6

4－3　調査対象校の日本語教育の現状

各校とも４学期制、各学期は約８週間で１月末、４月、７月、10月に始まる。３校ではＹ８～Ｙ12、12歳から17歳までが５年間のハイスクール教育の中で日本語を勉強している。初中等部分一貫校であるＭではＹ５からＹ12までが日本語を勉強している。前述のように、初等・中等教育のカリキュラムは公立校の場合は州政府のものに従うが、私立校の場合は学校の裁量に任されている。一般にＹ８から必修であるが、年間を通して日本語を学ばせる学校もあれば、学期毎に日本語、中国語、イタリア語、フランス語とさまざまな言語に触れさせる学校、半年は日本語、半年は別の言語という学校もある。Ｙ９からも、１年ごとに選択できる学校も、２年続けて履修しなければならない学校もある。授業の進め方も担当教師の教授スタイルや学校毎の特徴が反映されており、それぞれ特徴のある教育をしている。どの学校も日本語教室内に浴衣、人形、民芸品、ポスター、姉妹校の制服、通学かばんなどが飾ってあり、日本的な空間になっている。学期毎に授業内容に合わせ飾りも変えている。いずれの学校も日本に姉妹校や協定校を持ち、留学制度や相互の交流訪問がある。常時日本からの留学生が在籍している学校もある。

5　調査結果

データ数が少なく母集団を代表するとは言えないため、ノンパラメトリック検定により分析した。全体の傾向は度数分布表、必修・選択、学校別、学校の属性別による差は Mann-Whitney 検定と Kruskal-Wallis 検定で、データの分布は箱ひげ図[9]で検討した。

5－1　全体の回答傾向（表２参照）

①７割以上の同意者を得た項目は問２，３，13，19，27，29，30，31

②５割近くあるいは５割以上の同意者を得た項目は１，９，14，21，32，33

③同意者のほうが反対者より多い項目は６，10，12，18

④５割上の反対項目は23，反対意見が賛成意見より多い項目は７，17

⑤回答にばらつきが多かった項目は５，８，15，20，22，25，28，34

⑥５割以上の回答者が賛否を決めかねた項目は24，26

5－2　必修か選択かによる差（表３、図１参照）

問７，18，21，30，32，34の６項目が１％水準で有意、問12，13，20，22，29，33の６項目が５％水準で有意であった。

①必修のほうが７，18，１2，20への賛成が多い。

②選択のほうが21，22，30，32，34，13，29への賛成が多い。

33に関しては箱ひげ図からは違いが見えない。

5－3　学校別による差（表４、図２参照）

問９，13，14，15，16，23の６項目が１％水準で有意、問６，11，25，27，29，30，31，32の８項目が５％水準で有意であった。

①Ｍ：問９，15，16，６への賛成が多い。問23は、他の３校よりは反対者が少ない。

②Ｓ：問９，23については、Ｍと逆に同意しない者が多い。問31は強い賛成、問29は賛成、問14はかなり賛成が多い。問15，16に関して多様な意見が見られる。問11「毎日１時間勉強したらどのぐらいで外国語がうまくなるか」は、短時間で学べるという意見が他より多いが、多様な回答もかなりある。

③Ｕ：問14は賛成が多い。問15，25は、同意しない者が他校よりも多い。

④Ｊ：問27はそれほど強くは賛成しないも含め多様な回答がある。問30も他校と比較すると多様な回答が目立つ。

5－4　男子校・女子校・共学校による差（表６、図３参照）

問14，15，16，23の4項目が１％水準で有意、問３，６，11，13，25，30，31，33の8項目が５％水準で有意であった。箱ひげ図検討の結果、男子校が他校と異なるのは問３，６，11，16、女子校が他校と異なる項目は問14，25，31、共学校が他校と異なるのは問13、33であった。それぞれの学校の特徴の出た３項目は問15（男子校：やや同意、共学校：中立、やや同意、女子校：中立を挟んでやや賛成とやや反対）、問23（男子校：中立～やや反対に集中、共学校やや反対よりの中立、女子校：反対が５割）、問30（女子校：強く賛成、男子校：賛成５割、共学校；やや賛成）である。

表２　各項目への賛成、中立、反対別回答率

項目	分類		1.2	3	4,5
1	適性	子供のほうが大人より外国語を学びやすい。	56.5	33.3	10.1
2	適性	外国語学習に優れた人がいる。	71.0	18.2	10.9
3	困難度	他より学びやすい外国語がある。	80.3	12.0	7.7
5	方略	正しい発音で外国語を話すことは大切だ。	36.2	35.5	28.3
6	学習特性	外国語ができるためにはその国の文化も知る必要がある。	41.4	31.9	26.3
7	方略	正確に話せるようになるまで外国語で何も言うべきではない。	25.2	30.5	44.3
8	適性	外国語が一つできる人は他の外国語も容易に学べる。	29.8	35.7	34.5
9	学習特性	外国語はそれが話されている国で学ぶほうがいい。	48.5	32.4	19.1
10	方略	単語が分からないときは意味を推量すればいい。	41.7	31.1	27.1
12	学習特性	外国語学習は主に単語学習である。	46.6	33.8	19.7
13	方略	何度も繰り返し練習することは重要である。	87.0	5.2	7.8
14	方略	初歩段階で誤りを見過ごすと後で直すのは難しい。	53.5	25.7	20.8
15	学習特性	外国語学習は主に文法学習だ。	38.1	34.8	27.2
16	方略	カセットテープで練習することは大切だ。	29.0	40.3	30.7
17	適性	女性のほうが男性より外国語学習は得意だ。	17.6	44.4	37.9
18	困難度	理解するより話す方が簡単だ。	40.7	34.1	15.2
19	学習特性	外国語学習は他の教科とは違う。	72.1	14.3	13.6
20	学習特性	外国語学習は主に英語からの翻訳だ。	39.8	36.1	24.1
21	動機期待	日本語が上達すれば良い仕事の機会がある。	58.4	20.8	20.8
22	困難度	読む･書くほうが話す･聞くより簡単だ。	36.1	35.4	28.5
23	適性	数学や科学の得意な人は外国語が不得手だ。	8.6	32.7	58.7
24	動機期待	オーストラリア人は外国語学習が重要と考えている。	25.3	50.7	34.9
25	適性	複数の言語ができる人はとても優秀だ。	39.5	38.8	21.7
26	適性	オーストラリア人は外国語学習に優れている。	21.7	66.9	11.4
27	適性	誰でも外国語ができるようになる。	78.4	11.0	10.7
28	方略	他の人と日本語を話すのは恥ずかしい。	33.3	36.6	30
29	動機期待	日本人のことが良く分かるように日本語を学んでいる。	72.9	14.9	12.2
30	動機期待	日本語が上手になりたい。	80.3	8.9	10.8
31	動機期待	日本人の友達が欲しい。	76.1	14.1	9.8
32	困難度	自分は日本語がうまくなると思う。	58.6	26.6	14.9
33	方略	日本人と日本語を練習するのが楽しい。	65.6	21.5	13.0
34	適性	自分は外国語学習に特別な能力がある。	24.8	37.6	37.6

問４と 11 を除く　下線と網掛けは賛成が７割以上、網掛けは賛成、どちらとも言えない、反対が５割以上の回答

表３　必修か選択による差

問７　.000**	問 12　.015*	問 13　.013*	問 18　.001**
問 20　.011*	問 21　.000**	問 22　.037*	問 29　.045*
問 30　.000**	問 32　.001**	問 33　.009*	問 34　.001**

**は１％水準で有意　　*は５％水準で有意

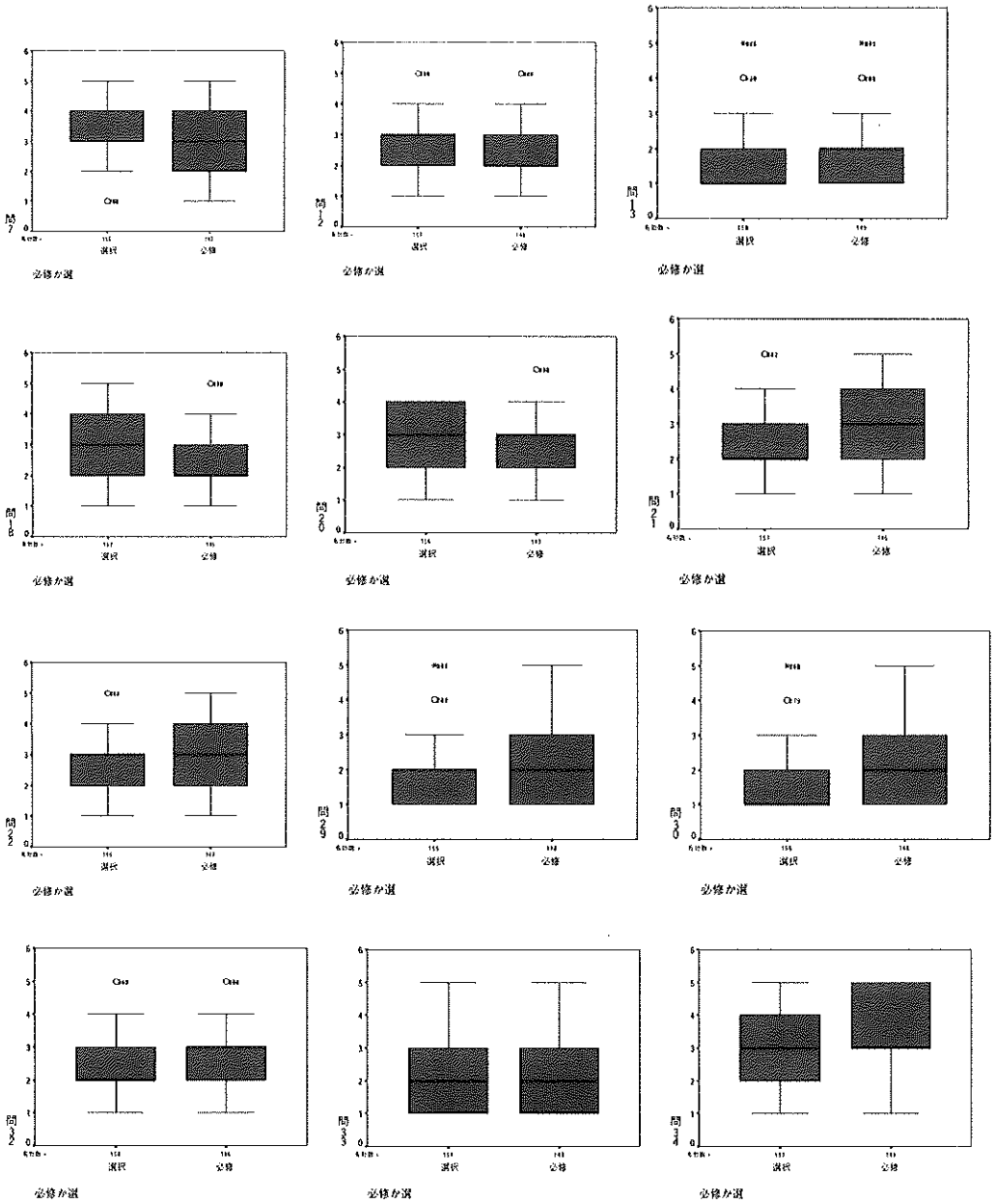

図１　選択・必修別箱ひげ図

表４　学校別による差

問６　.017*	問９　.006**	問 11　.022*	問 13　0.00**	問 14　.000**
問 15　.001**	問 16　.000**	問 23　.000**	問 25　.039*	問 27　.018*
問 29　.011*	問 30　.011*	問 31　.021*	問 32　.011*	

**は１％水準で有意　　*は５％水準で有意

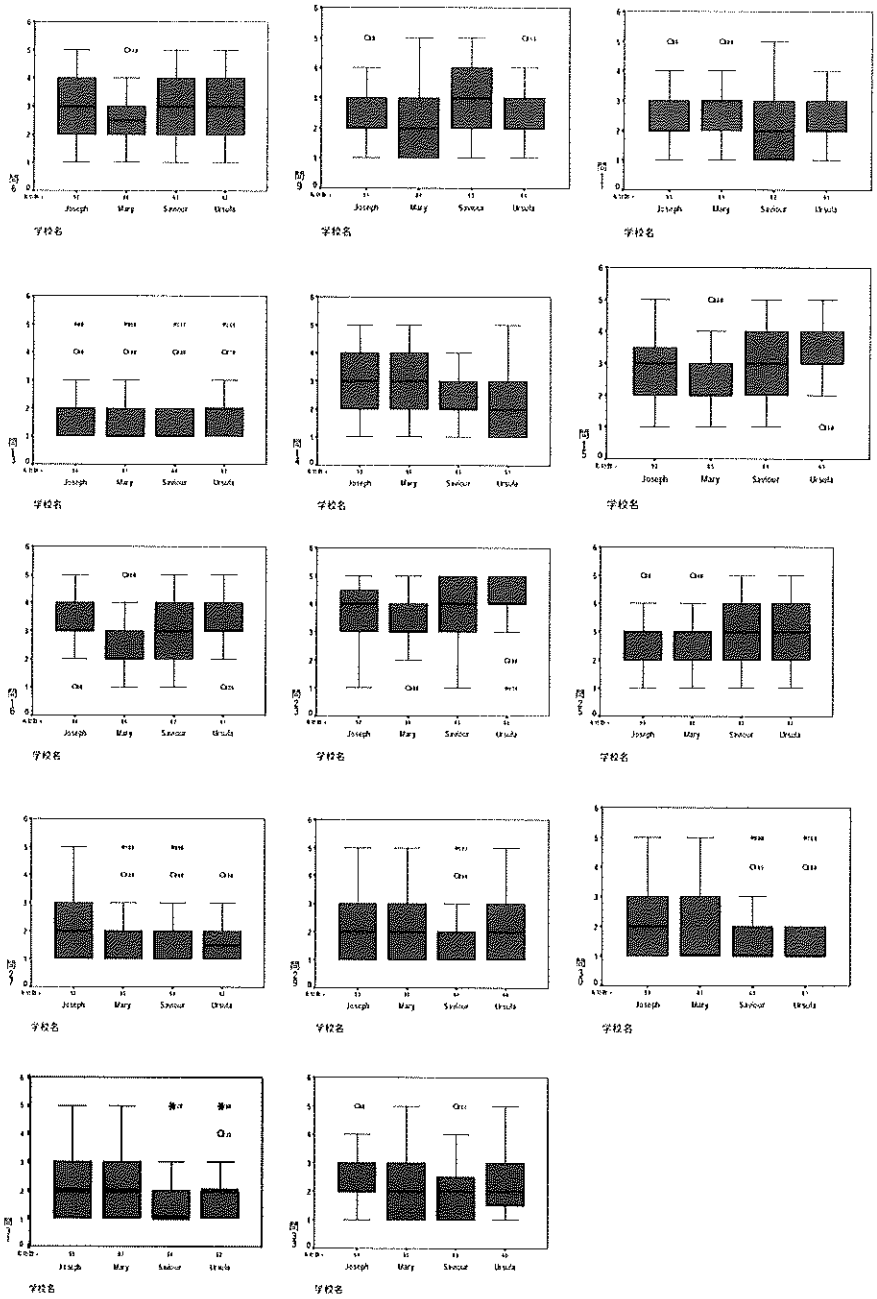

図２　学校別箱ひげ図

表５　男子校・女子校・共学校による差

問３	.041*	問６	.010*	問 11	.012*	問 13	.008*
問 14	.001**	問 15	.001**	問 16	.000**	問 23	.000**
問 25	.020*	問 30	.010*	問 31	.009*	問 33	.017*

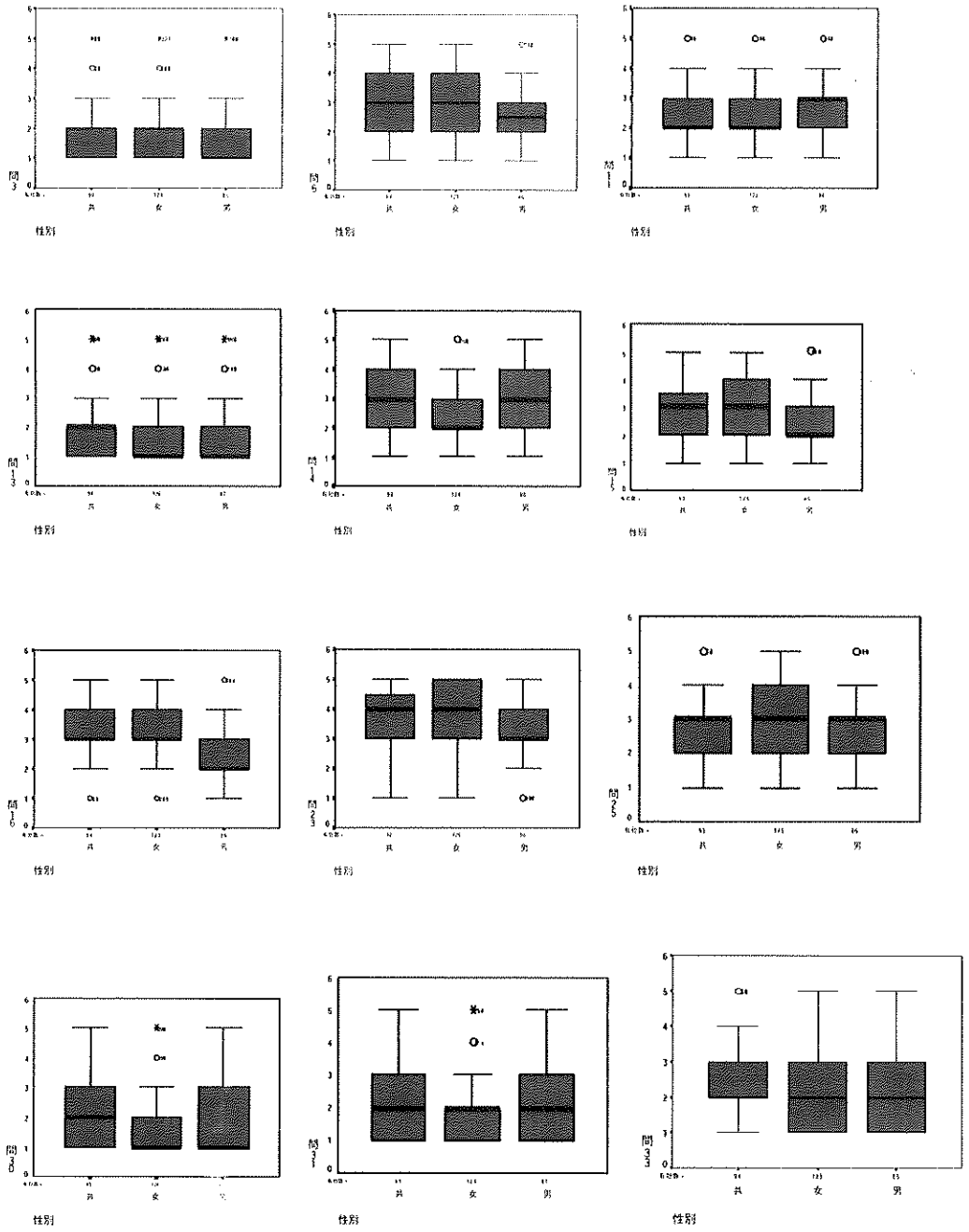

図３　共学・男子校・女子校別箱ひげ図

6　考察

6－1　全体の回答傾向

語学学習の困難度に関する認識は、８割以上の者が「外国語により学習の難易度が異なる」と思っている。日本語は「中程度の難しさの言葉だ」と認識しているが「やや難しい」と思う者もいる。「毎日１時間の学習で３～５年で言葉が上手に話せるようになる」との認識が多く、６割近くが「自分は日本語が上手になると思う」と回答している。「外国語は読む・書くほうが話す・聞くより簡単だ」に関しては意見が分かれるが、「話す方が聞くより簡単だ」は４割が賛成している。水田ら（1995）[10]の報告では大学生は前者にほぼ中立的、後者にやや否定的回答をしている。対象者の年齢と学習内容の違いが回答に影響を与えている可能性がある。対象校では、例えばＹ８は挨拶、ひらがな、100までの数、動物名、カタカナ語を聞いて英語に直す、Ｙ９はカタカナと短い文章、漢字少々、Ｙ10は漢字、文を読んで日本語で答える、Ｙ11，12になると本格的に学ぶ、というような学習内容である。

外国語学習に関する適性については、大多数が「誰でも外国語ができるようになる」（８割近く）が、「外国語学習に優れた人がいる」（７割）とも思っている。ドイツ語、フランス語、スペイン語を学ぶ大学生への調査では前者への同意率は同じだが、後者に対しての同意率は５割前後に落ちている（Horwitz，1988）。半数強が「子供は大人より外国語を学びやすい」と思うが、「理系の得意な人は語学が不得手」に対しては半数以上が反対し、「女性のほうが外国語学習に優れている」についても同意する者は少ない。「複数言語が出来る人はとても優秀」に関しては答えが分かれ、「オーストラリア人が外国語学習に優れている」については中立の回答が多い。ここでの特徴は子供と大人の語学学習適性についての成人学習者と生徒たちの認識の差である。Horwitz（1987）[11]の調査では成人ESL学習者は８割が子供のほうが適性ありと回答している。

学習特性に関しては７割以上が「外国語学習は他の教科の勉強とは違う」と考える。これは水田ら（1995）の調査のオーストラリア人大学生（以下、大学生）、Horwitz（1987）の調査のアメリカ人大学生や多国籍成人学習者の回答と同じであり、母語・年齢に影響されない項目と言えよう。「語学は現地で学ぶほうがいい」、「語学学習は主に単語学習である」と考える者が半数近くいる。「外国語ができるためには文化も知る必要がある」や、「語学学習は英語からの翻訳である」、「文法学習である」との認識も４割近い。これらには中立意見も３割強あり、回答が分散している項目であり、学校別あるいは学年別の教授スタイルの違いなどに起因している可能性がある。大学生の回答が、文法重視に関しては賛成が多く、文化学習、翻訳、単語学習の重要性については中立に集中しているのと異なる。文化、単語はまさに生徒たちの学んでいる内容で文法レベルまではなかなか到達しない。また翻訳重視もコミュニケーション中心教育[12]のオーストラリアでも限られた授業時間内で学習効果をあげるために翻訳が多用されている可能性を示している。

方略は学習に関しては、「大量の繰り返し練習は大切」には賛成だが、「テープでの練習の重要性」については中立回答が多い。大学生はどちらも支持している。Horowitz（1987）では支持率は98％にも上る。学習内容の相違や調査時期の相違もあるが、成人はオーディオリンガル時代の学習観が強いと言えよう。コミュニケーションに関しては「学習初期段階で誤りを見過ごすと後で直すのは難しい」と考える者が多い。「正確に言えなくても外国語で話したほうがいい」し、「単語がわからない時は意味を推量すればいい」には賛成意見のほうが多い。推量については大学生の回答は中立である。「出会った日本人と日本語を練習するのは楽しい」には６割強が賛成しているが、「他の人と日本語を話すのは恥ずかしい」は意見が分かれる。理由として生徒たちは自校の日本人アシスタントとの会話練習を楽しんでいるが、町で出会う日本人には積極的に話しかけられない可能性が考えられる。恥ずかしさに対して大学生はほぼ中立回答であるが、街中で出会う日本人は成人である可能性が高く、年齢も壁になっていると推察できる。成人学習者もやや恥ずかしいとの回答がかなり多いが、情意フィルターの問題であろう。

日本語学習の動機づけと期待は肯定的である。８割が「日本語が上手になりたい」、８割近くが「日本人の友達が欲しい」、７割以上が「日本人のことがよく分かるように日本語を学んでいる」と回答した。半数以上が「日本語の上達は良い仕事の機会への道である」と思っている。「オーストラリア人は外国語学習を重要と考えている」は中立回答が多い。教員不在のため教師が巡回して授業をする例もある公立校と比べると恵まれた学習環境で学ぶ生徒たちは、全体として高い動機づけと期待を示しているのではなかろうか。最後の３項目について大学生の回答は全て肯定的である。台湾人大学生は「日本人理解のための日本語学習」にやや否定的で、学習動機は道具的と言える。オーストラリ

ア人大学生は統合的学習動機であるといえよう。一般に学習動機はアジア圏では道具的、欧米圏では統合的である[13]。

6－2　必修か選択による差

必修の学習者は、「語学学習は正確さ」、「語彙の勉強」を重視し、「英語からの翻訳で学ぶ」という考えが強く、日本語は「理解するより話すほうが簡単だ」と感じている。前項でも述べたようにＹ８では挨拶、ひらがな、100までの数、動物名、カタカナ語を聞いて英語に直すなどの学習内容を45分ずつ週２、３回程度学ぶ。この学習体験から導き出されたBeliefであろう。

選択の学習者は学習方略に関しては「繰り返し練習の重要さ」に同意する者が多い。日本語学習に関しては、「日本人のことをよく知るために日本語を学ぶ」、「日本語がうまく話せるようになりたい」と思い、「自分は日本語が上手になれる」、「外国語学習能力がある」と思っている。必修学習者に比べると、動機づけも高く、自身の能力も高く評価していると言えよう。表１に見るように各校とも日本語を選択する生徒数は少ない。Ｙ８からＹ９の段階で極端に減り、Ｙ10からＹ11の段階で更に減る。成績が悪ければ留年しなければならないこと、義務教育はＹ10までであること、Ｙ11、12は進学を視野に入れた勉強に専念したい生徒が増えること、また学習内容が格段に難しくなることなどが原因としてあげられよう。また、調査項目にはないが文字学習の困難さが日本語学習を諦める一因でもある[14]。

6－3　学校別の差

M校生の学習方略は「文法学習」、「音声教材重視」、「語学学習と共に文化学習の重要さ」、「外国での学習志向」である。また「理系の人は語学学習に向いていないかもしれない」と考える者が他校より多い。M校では４年生～６年生に相当するＹ５～Ｙ７で日本語が必修である。オーストラリア人専任教員２名と日本人アシスタント（以下、アシスタント）１名がいる。教科書とテープを使用する。大規模男子校のためか規律は厳しく、休み時間には教室は施錠されて生徒は廊下で待つ。入室後、「起立」「先生おはようございます」「お元気ですか」「はい、元気です。先生は？」などのやり取りがあり、「着席」となる。小学生は出欠カード、中高生はアシスタントが出席を取り、生徒は口頭で「はい、います」「いいえ、いません」と応える。隔年に日本旅行があり、京都、大阪、東京観光の後、姉妹校でホームステイをする。これらの学習環境がBeliefに影響を与えている可能性は高い。

M校生と対照的なのがＳ校生で「理系は語学に弱い」ことはないし、「外国へ行かなくても日本語は学べる」と思っている。これは「かなり短期間で日本語がマスターできる」との認識と関係があるかもしれない。「初期段階の誤用訂正の重要性」を認める一方、「語学学習は文法学習」、「テープでの練習重視」に関しては多様な意見が見られる。学習動機は「日本人について理解したい」、「日本人の友人が欲しい」との回答が他校より多いのも特徴である。Ｓ校は女子校でオーストラリア人専任教師１名、アシスタント１名で、教科書とテープを使用して教える。授業はなごやかな雰囲気で進み生徒はよく発言する。遅刻した生徒は「遅れてすみません」と言って入室していた。姉妹校からの留学生が日本語クラスにいる。

同じく女子校であるU校の生徒はＳ校生同様「初期段階の誤用訂正の重要性」を認める。「語学学習は文法学習」、「複数言語が出来る人は優秀」について反対意見が多いのは、「誰でも外国語は学べる」との認識（中央値が1.5と他校より高い）からも支持されている。オーストラリア人教員３名、アシスタント１名がいる。調査時には教員1名はアフリカからの難民クラスで英語を指導しており[15]、日本語教育はしていなかった。見学したクラスではクラスを二つに分け、それぞれに教師とアシスタントがついて前回の復習をし、その後授業に入っていた。授業には歌やゲームが取り入れられていた。行儀がいい生徒たちであった。この学校は基本となる必修科目を３学期間続けて履修しなければならないが、残りの学期に履修可能な選択科目が20も用意されており、生徒は自分の興味に合った課目を学べることが特徴である。日本各地の姉妹校３校が来豪するなど交流が盛んである。

Ｊ校生は他校生と異なり、「誰でも外国語が話せるようになる」について、それほど強くは賛成しない人もいるなど多様な意見がある。「日本語が上手になりたい」に関しても、他校よりは強く同意する者が少ない。Ｊ校は他校と比較して一番自由な学校という印象を受けた。多様な考えを認め合う教育が行われているのかもしれない。４校の中で唯一日本人教師がいる。教師１名とアシスタント１名で、必修クラスでは教師自作の文化中心の教材を用いて授業をしている。Ｙ11,12の合同クラスでは教科書を用いず、日本語の構文について学んでいた。見学クラスはいずれも自由な雰囲気で積極的に発言させていたが、中には学習意欲に欠けているように見える生徒もいた。他校のように既成の教科

書に頼りすぎず、生きた日本語を学ばせたいという教師の思いを受け止め切れない生徒もいるのかもしれない。Ｙ８は日本語とフランス語を半年ずつ学ぶ。Ｙ９からは選択だが日本語を取ると２年続けて履修しなければならない。このシステムでは途中でつまずくと学習意欲を失う可能性もあろう。

６－４　共学校、女子校、男子校による差

共学・女子・男子校の差を示した項目は３つある。「語学学習は文法学習」は同意率の高い順に男子校（やや同意）、共学校（中立及びやや同意）、女子校（中立を挟んでやや賛成とやや反対）、「理系は語学が苦手」は反対の多い順に女子校（反対が５割）、共学校（やや反対）、男子校（中立からやや反対、回答の幅は一番狭い）、「日本語上達意欲」は強い順に女子校（強く同意５割）、男子校（同意＞やや同意）、共学校（やや同意＜同意）である。

特定校だけの特徴を見ると、男子校は「より学びやすい言語がある」、「文化学習、文法学習、テープ練習の重要性」に同意意見が多いが、これは学校別の特徴でみられた結果と同様である。語学習得には時間がかかるとの意見が多い。「１日１時間の学習でどのぐらいの期間で外国語が上手になるか」に対して他校（１～２年）より長い時間が必要（5～6年）との回答が多い。

女子校は「初期段階の誤用訂正の重要性」「日本人の友達が欲しい」について同意が多く、「複数言語話者は優秀」には反対意見もある。最初の項目は学校別でＳ校、Ｍ校に共通に観察された。次の２項目はＳ校、Ｍ校に個別に見られた特徴である。

共学校は「繰り返し練習の重要性」と「日本人との練習は楽しい」について他校ほど強くは同意しない。これは他校と異なる教授スタイルが影響している可能性も考えられる。前述のように他校ほど繰り返しは要求されていないし、アシスタントの役割も異なっている。

７　おわりに

本稿ではオーストラリア、クイーンズランド州の初等・中等私立校四校で日本語を学ぶ学習者（以下、学習者）のBeliefを調査し、全体、必修・選択、学校別、学校の属性別で考察した。併せて彼らの学ぶ学習環境や日本語授業の様子を紹介した。調査校の学習環境や授業はオーストラリア日本語教育の目標とされる国際理解・異文化理解、日本との親善交流の促進が達成できるものであった。学習者のBeliefもそれを支持した。彼らの語学学習に関するBeliefを成人学習者のものと比較し検討した。学習者のBeliefは成人学習者と共通のものも異なるものもあった。また、必修・選択によるBeliefの相違は予想された結果であった。しばしば問題点として指摘される学習者の動機づけ、不熱心さややる気のなさなどに関しては、生徒たちは高い動機づけと期待を示した。学校別の差は興味深い結果を示した。これらの相違は、各校の教育理念、教育・学習環境、教師のBelief、教授スタイル、生徒の出身文化、家庭文化、学習経験、その他多くの要因により規定されると考えられるが、本稿では複数回の授業見学や教員、アシスタント、生徒との面接結果などをもとに考察をした。

本稿で明らかにされた初等・中等教育日本語学習者のBeliefが一般性を持つものかどうかは今後検証されなければならない。また、学校別と学校の属性別（男子校・女子校・共学校）のBeliefの相違については、十分な考察はできず、単に相違を述べるに留まった。今後の課題としたい。

謝辞

本研究に協力してくださった四校の教員、生徒の皆さん、そして研究法に関し貴重なアドバイスをくださった福岡教育大学の高梨芳郎先生に心より感謝いたします。

なお本研究は2004年度西南女学院大学共同研究費の助成を得て行われた。

注および引用文献

1）国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状　日本語教育機関調査・2003年』凡人社　最新の資料によると海外では127カ国・地域で235万人が日本語を学習している。学習者総数は韓国、中国、オーストラリアの順であるが、人口割にするとオーストラリアは52人に一人、韓国は53人に一人で、ほぼ等しくなる。

2）韓国、ニュージーランド、マレーシアも同様に高い(前掲書、ｐ.90)

3）川上郁雄・藤長かおる(1995)「オーストラリアの初等・中等教育における日本語教育ークイーンズランド州における経験からー」『世界の日本語教育(日本語教育報告書編)』２、195-211.

4）学習者はビクトリア州、10万3千人、クイーンズランド州10万人で、両州で初等・中等教育学習者総数の６割を占めている。

5）英語でCollegeと言い、初等課程を含む学校もあるが本稿では高校と訳す。

6）Horwitz, Elaine K.(1988)The Beliefs About Language Learning of Beginning University Foreign Language Students, *The Modern Language Journal*, 72, iii, 283-294.

7）巻末資料参照。

8）表２を参照。

9）内田修(1997)『すぐわかるＳＰＳＳによるアンケートの調査・集計・解析』　東京図書
箱ひげ図の箱は上側ヒンジ（全データの75%がその値よりも小さくなる所）と下側ヒンジ（全データの25%がその値よりも小さくなる所）からなる〝箱〟と、外れ値ではない最大値と最小値に至る〝ひげ〟によって構成される。箱の幅をヒンジ幅と言う。箱にはデータの中央50%が含まれる。箱を横切る太線は中央値を示す。この端からヒンジ幅の1.5倍から３倍の間にあるデータははずれ値、３倍より離れているデータは極値として示すようになっている。

10）水田直美・黄其正・張金塗・伊藤克裕・細田和雄(1995)「日本語学習に関するビリーフ　ー台湾とオーストラリアの大学生日本語学習者の比較ー」『広島大学日本語教育学科紀要』第５号、61-66.

11）Horwitz, Elaine K.(1987)Chapter 9 Surveying Student Beliefs About Language Learning, in (ed) Anita Wenden & Joan Rubin, Eaglewood. *Learner Strategies in Language Learning* , Calif. NJ: Prentice-Hall
119-129.

12）国際交流基金、ｐ.77.

13）国際交流基金参照

14）日本人アシスタントからの口頭報告による。

15）LOTE政策実施にともない、他の教科の教師から日本語教員になった例が多いが、この教師を含め、調査対象３校のオーストラリア教員は、全員フランス語や英語の教員であった。

資料

Toowoomba Students of Japanese Survey Date_____ Grade_____

School Name_____

Below are beliefs that some people have about learning foreign languages.

Read each statement and then decide if you:
1. strongly agree
2. agree
3. neither agree nor disagree
4. disagree
5. strongly disagree

There are no right or wrong answers. We are simply interested in your opinions. Circle each answer. Questions 4 and 11 are slightly different and you should mark them as indicated.

1. It is easier for children to learn a foreign language.
   1 2 3 4 5
2. Some people have a special ability for learning foreign languages.
   1 2 3 4 5
3. Some languages are easier to learn than others.
   1 2 3 4 5
4. Japanese is:
a. a very difficult language
b. a difficult language
c. a language of medium difficulty
d. an easy language
e. a very easy language

5. It is important to speak a foreign language with an excellent accent.
   1 2 3 4 5
6. It is necessary to know about a foreign culture in order to speak a foreign language.
   1 2 3 4 5
7. You shouldn't say anything in the foreign language until you can say it correctly.
   1 2 3 4 5
8. It is easier for someone who already speaks a foreign language to learn another one.
   1 2 3 4 5
9. It is better to learn a foreign language in the foreign country.
   1 2 3 4 5
10. It's OK to guess if you don't know a word in the foreign language.
   1 2 3 4 5
11. If someone spent one hour a day learning a language how long would it take him or her to speak the language very well?

a. Less than a year
b. 1-2 years
c. 3-5 years
d. 5-10 years
e. You can't learn a language in 1 hour a day

12 Learning a foreign language is mostly learning a lot of new vocabulary words.
   1 2 3 4 5

13. It is important to repeat and practice a lot.
1 2 3 4 5
14. If you are allowed to make mistakes in Japanese in the beginning, it will be hard to get rid of them later.
1 2 3 4 5
15. Learning a foreign language is mostly learning a lot of grammar rules. .
1 2 3 4 5
16. It is important to practice with cassettes or tapes.
1 2 3 4 5
17. Women are better than men at learning foreign languages.
1 2 3 4 5
18. It is easier to speak than to understand a foreign language.
1 2 3 4 5
19. Learning a foreign language is different from learning other school subjects.
1 2 3 4 5
20. Learning another language is a matter of translating from English.
1 2 3 4
21. If I learn Japanese very well, I will have better opportunities for good job.
1 2 3 4 5
22. It is easier to read and write a language than to speak and understand it.
1 2 3 4 5
23. People who are good at mathematics or science are not good at learning foreign languages.
1 2 3 4 5
24. Australians think that it is important to speak a foreign language.
1 2 3 4 5
25. People who speak more than one language well are very intelligent.
1 2 3 4 5
26. Australians are good at learning foreign languages.
1 2 3 4 5
27. Everyone can learn to speak a foreign language.
1 2 3 4 5
28. I feel timid speaking Japanese with other people.
1 2 3 4 5
29. I would like to learn Japanese so that I can get to know Japanese better.
1 2 3 4 5
30. I want to learn to speak Japanese well.
1 2 3 4 5
31. I would like to have Japanese friends.
1 2 3 4 5
32. I believe that I will learn to speak Japanese very well.
1 2 3 4 5
33. I enjoy practicing Japanese with the Japanese I meet.
1 2 3 4 5
34 I have a special ability for learning foreign languages.
1 2 3 4 5

Beliefs of Australian Elementary and Secondary Students Regarding Japanese Language Study

Hisayo Yokobayashi　L.Dennis Woolbright

＜Abstract＞

Australia ranks third in the world in regards to the number of Japanese learners in the world. The overwhelming majority of these learners are elementary and secondary students. To date there has been little research into Japanese language study for this age group. Therefore this study examines "beliefs" of learners of the Japanese language attending four private elementary and secondary schools in the city of Toowoomba, Queensland, Australia. First the "beliefs" are considered as a whole, then they are examined by the following classifications, individual schools, required or elective courses, boy's and girl's schools and finally coed schools. Private schools are of said to have a freer curriculum than public schools. This tendency was shown in the objectives of the students for studying the Japanese language, which were mainly international exchange, culture study and on the personal level making Japanese friends. The surveys as well as our own observations indicate that these goals are being met. It is often said that young students are not well motivated to study foreign languages, however according to the results of the surveys these students have much interest and high motivation to study the Japanese language.

Keywords: elementary and secondary Japanese language education, private school students, student's beliefs, inter-cultural understanding, motivation